熊野の森から

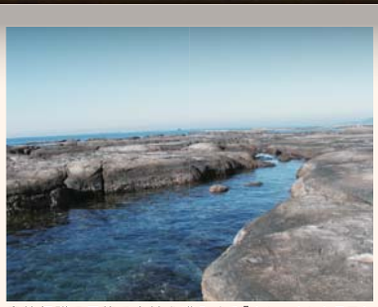
怪しの熊野

其の六十

「旧・田辺市の怪異（其の三）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

田辺の天神崎には「猩々（ショウジョウ）」の話が伝わる。ある夜、笛の上手な若者が天神崎の浜で笛を吹いていると、美しい娘が現われて「私はこの海に住む猩々です。もう一曲吹いてください」としきりに頼む。若者が何曲か吹いてやったところ、猩々は「お礼に釣り道具を差し上げます。餌はなくとも望みの魚が釣れます」と自分の髪の毛を抜き、釣り針を付けて若者に渡し、海に消えた。若者が元島の沖磯で釣り糸を垂れると、サバやタイ、カツオなどが望む通りに釣れた。このため、若者が釣りをした磯はショウジョウと呼ばれるようになったという。その後、若者は白浜の堅田へ移り住み、猩々の釣り道具を「人が持っていてはいけない」と八幡さまへ納めたという。堅田の隣の細野には、酒好きの猩々を捕らえるため強い酒を置き、海から出てきた猩々が飲んで酔ったところを捕まえ、その毛を得た者がいたという。この場所は、今でも「しょうじ（猩々）小屋」と呼ばれているそうで、堅田八幡の秋祭りで先頭を歩く社守が被る鬼面の髪の毛や、稚児の舞の獅子の毛が天神崎や細野の「猩々の毛」だという話もあるが、定かではない。



自然保護の目的で土地を購入する「ナショナルトラスト運動」の日本での先駆地でもある天神崎の磯には猩々（ショウジョウ）が棲むという。たいそうな美人らしく、猩々からもらった釣り道具はエサをつけなくても望んだ魚が釣れるそうだ。

「猩々の毛」が納められたという堅田八幡神社は、獅子舞で有名だ。鬼の面や獅子の毛が「猩々の毛」だという話がある。（写真提供、吉村旭輝氏）

猩々の名前は、中国から日本に伝搬したようだ。十六世紀の中国の『本草綱目』には「南国に住み、毛色は黄色で、声は子どもに似るが時に犬が吼（ほ）えるようなこともあり、人の言葉を理解し、人と似た顔や足を持ち、酒を好む動物」と書かれている。オランウータンのことだといわれることもあるが、豚に似ている、いや犬に似ているという話もある。日本では、真っ赤な装束の猩々が酒に浮かれ舞い謡う能の演目があり、また各地にも類話が残る。和歌山以外では、宮城、岩手、山梨、富山、兵庫、鳥取、山口などの伝承に登場するが、多くが海と関係した話である。例えば、富山の氷見の猩々は、海から船に乗り込んできては舳先に座るという。多い時は数匹のこともあり、船乗りが驚いて騒いだりすると船をひっくり返されてしまう。山口の周防大島の猩々は、柄杓で船に水を組み入れて沈めてしまう船幽霊のような化け物だ。どうも、中国や日本各地の猩々と、天神崎や堅田の猩々は別の妖怪のようだ。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。